研究プロジェクト名称	**Exploration of Practical Wisdom and Resilience Overcoming Downside Risk - Collecting grassroots voices in Africa under COVID-19** **（ダウンサイドリスクを克服するレジリエンスと実践知の探究 – 新型コロナ危機下のアフリカにおける草の根の声）**
研究期間	2021 年 12 月～2024 年 11 月

研究代表者

氏名	華井和代
所属機関・役職	東京大学 未来ビジョン研究センター 講師

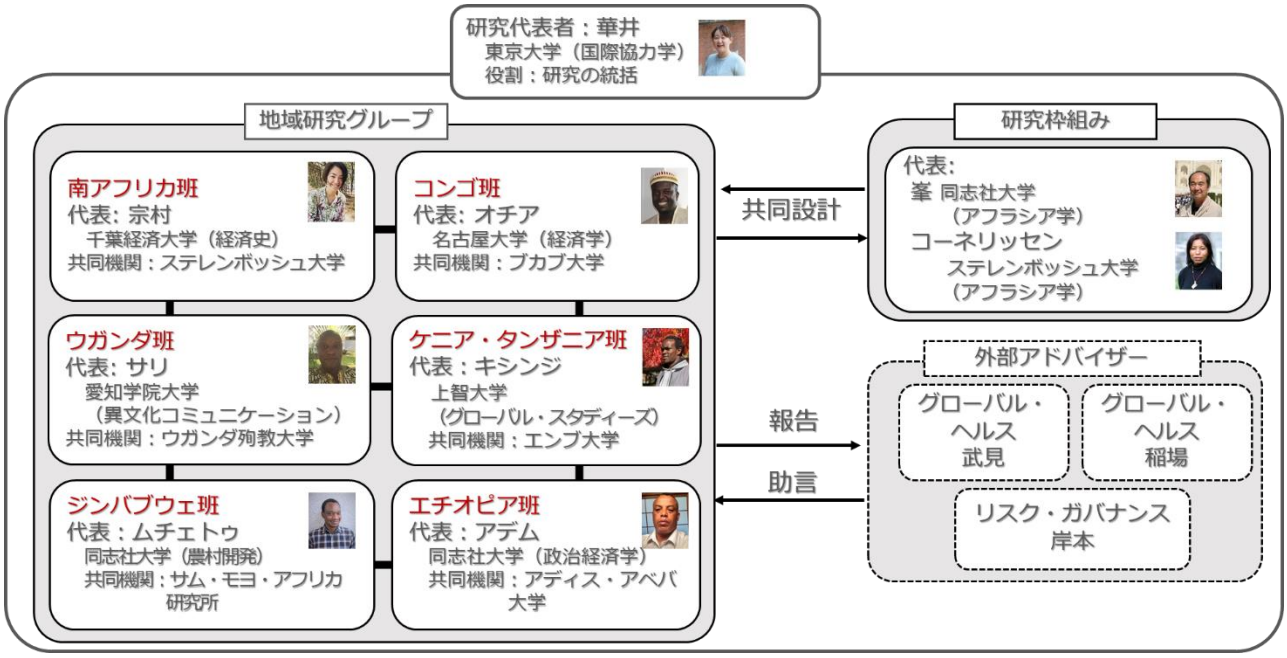
研究概要

本研究の目的は、アフリカにおいて新型コロナの感染拡大と各国政府による対応策の両方が人々にもたらすリスクとリスク認知の実態をとらえたうえで、人々が実践知を駆使してリスクを克服していく過程を明らかにし、政府機関や援助機関等による感染症対策に対する政策提言を行うことにある。対象地域は南アフリカ、コンゴ民主共和国、ウガンダ、ケニア、タンザニア、ジンバブエ、エチオピアの 7 か国である。対象国ごとに日本と各国の研究機関の連携によるグループを設立し、国際共同研究体制を構築する（図）。

世界的な新型コロナウイルス感染拡大の中で、アフリカには独自の懸念がある。第 1 に、保健医療体制や衛生設備が整っていない環境下での感染症対策に困難がある。第 2 に、各国政府による国境閉鎖や夜間外出禁止令などの厳しい政策が住民の生計を困難にさらす一方で、警察による暴力的な取り締まりによる被害が発生している。第 3 に、暴力的取り締まりが政府と国民の間の不信感を生み、感染症対策やワクチンの普及を妨げている。第 4 に、アフリカにはエボラ出血熱やマラリアなど他の感染症が併存しており、新型コロナ対策への集中が他の疾病による超過死者数を増加させている。

こうした状況に鑑みて本研究は、新型コロナウイルスの感染拡大をダウンサイドリスクとしてとらえる。アマルティア・センは人間の安全保障に関する報告書の中で、ある 1 つのリスクの発生によって他の潜在的なリスクが雪だるま式に悪化していくきっかけとなるリスクをダウンサイドリスクとよんだ。新型コロナの感染拡大は、感染そのものに加えて、厳しい政策や暴力的取り締まり、飢餓、教育の中断、他の感染症の拡大など、多重リスクが人々を襲うきっかけになっている。そのため、個々のリスクに注目するのみならず、本研究はリスクにさらされる人間の側の視点から、リスクをとらえる。

研究方法として、現地研究者がフィールド調査を実施すると同時に、アフリカで普及している WhatsApp などのオンライン・コミュニケーション・ツールを活用し、対象地域の人々の日常的な生活状況や感情の変化を「プライベート・メッセージ」として収集する。それによって、新型コロナ危機下での「草の根の声」を収集し、3 年間の研究期間中に人々が実践知を駆使してリスクを克服していく過程を動的にとらえる。


研究代表者：華井
東京大学（国際協力学）
役割：研究の統括
地域研究グループ
南アフリカ班
代表：宗村
千葉経済大学（経済史）
共同機関：ステレンボッシュ大学
コンゴ班
代表：オチア
名古屋大学（経済学）
共同機関：ブカブ大学
ウガンダ班
代表：サリ
愛知学院大学
（異文化コミュニケーション）
共同機関：ウガンダ殉教大学
ケニア・タンザニア班
代表：キシンジ
上智大学
（グローバル・スタディーズ）
共同機関：エンブ大学
ジンバブウェ班
代表：ムチェトウ
同志社大学（農村開発）
共同機関：サム・モヨ・アフリカ研究所
エチオピア班
代表：アデム
同志社大学（政治経済学）
共同機関：アディス・アベバ大学
共同設計
研究枠組み
代表：
峯 同志社大学
（アフラシア学）
コーネリッセン
ステレンボッシュ大学
（アフラシア学）
報告
助言
外部アドバイザー
グローバル・ヘルス
武見
グローバル・ヘルス
稲場
リスク・ガバナンス
岸本

【図：研究体制】